

---

# Fantastic War

池波創路

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fantastic War

### 【Nコード】

N7883Y

### 【作者名】

池波創路

### 【あらすじ】

『Fantastic War』  
トリプルデー  
DDD社が開発した次世代型ゲーム。

全世界で絶大的な人気を誇り、社会現象を起こしている。

現実世界の”人間”がゲーム内の”人間”を操作する。  
操作するプレイヤー、操作されるキャラクターの駆け引きがゲームの流れを左右する。

冴えない人生を送る向田宗佑は、このゲームと出会い、新たな人生を歩むことになるのであった。

あらすじは仮です。今後、内容によって追記します。

## プロローグ

今日もまた仕事がなかった…。

「くそつ。」

啜えた煙草を足元に捨て、足で踏み消す。

スマートフォンを片手に不精髭を生やした男は駅へ向かい歩いていく。

むかいだそうすけ  
向田宗佑 28歳、無職。

世間ではアラサーなんて言葉が定着しているが、俺から言わせれば耳障りな言葉だ。

元々は会社勤めのサラリーマンだったが、数ヶ月前にリストラされた。

なかなか次の職は見つからず、日雇いのアルバイトをして、なんとかその日暮らしをしている状態だ。

人生終わってるよな。

このまま残りのつまらない人生を平凡に過ごし、死んでいく。

そう思っていた。

あのゲームと出会うまでは…。

「昨日のあれ見た？」

「ああファンウーだろ？見た見た。」

「1人腕なくなってたよね。」

「あれってやつぱマジなの？」

「わかんねーやらせて話もあるらしいよ。」

電車の吊り革に捕まり、『Fantastic War』と書かれた電車の中刷り広告に目をやる宗佑。筋肉質な男が銃を持ってポーズしている。持っている銃はおそらくM4カービンだ。コルト社が開発したアサルトカービンでアメリカ陸軍でも使用されている。無駄に知識はある。俺はミリタリーな映画が好きだ。

『Fantastic War』とは最近流行っているゲームである。いや、最早流行っているを通り越して、社会現象になりつつある。若者たちの間では「ファンウー」とか「ファンタ」、「非現戦争」なんて呼ばれてる。日本人は呼称を付けたり、略するのが本当に好きだ。

ファーストパーソン・シューティングゲーム  
いわゆるFPSというジャンルで、一人称視点のプレイヤーが敵味方に別れて銃で撃ち合い、勝敗を競うゲームだ。俺も昔やったことがあるが、画面を覗いているだけで酔ってしまい、何が面白いのかわからなかった。まだ、サバゲーの方が面白いと思う。まあサバゲーはやったことはないのだが…。

FPSなんてジャンルは特定の層の人間にしか好まれないジャンル

なのだが、このゲームが爆発的にヒットしたのは、理由がある…。ゲームの中で実際に操作するキャラクターがプレイヤーと同じ、現実に存在する”人間”なのだ。

俺らの世代からすれば、ゲームといえばテレビゲームが主流だった。テレビゲームも年々進化を遂げ、インターネットの普及によってゲームもネットに繋げてプレイするのが当たり前になった。俺がゲームに興味を持っていたのはこのぐらいの技術のときで、今はさらに進化を遂げている。

詳しい技術は俺もうる覚えなのだが、ゲーム内の操作キャラクターは実際の”人間”であり、現実世界のプレイヤーはゲーム内の操作キャラクターと脳がリンクすることで、自分の分身のように操作することができるようになるらしい。例えば、モニターの前で自分がジャンプをすれば、ゲーム内の操作キャラクターも同じようにジャンプをする。これは、脳科学の進歩により、”人間”の脳に固有の番号を与えたチップを埋め込み、別の人間からそのチップへ命令となる信号を直接脳に送ることが可能となったからである。

この技術はBLC (Brain Link Communication) と呼ばれている。

数年前から仮想空間（現実には存在する場所だが、プレイヤーには非公開）で、別の”人間”を自分の分身として生活させ、仮想空間内でコミュニケーションをとることができる『DreamExp』がヒットしたことで近年爆発的に普及した。『DreamExp』は10年以上前に流行した、SNSソーシャル・ネットワーキング・サービスの中ですく自分の分身、アバ

ターのようなものだ。実際の”人間”を購入し、自分の好みの服を着せ、仮想空間で自分の分身のように操作するのだ。

あるものは、人気モデルを操作し、仮想空間の雑誌の表紙を飾る。

あるものは、金持ちを操作し、毎晩ギャンブルに溺れる。

あるものは、イケメンを操作し、毎晩違う女と一夜を共にする。

またあるものは、現実とは正反対の性別を操作し、違う人生を歩む。

実際操作しているプレイヤー側は、モデルとはほど遠いデブスだったり、彼女いない歴〃年齢の童貞だったりするのだ。

現実世界でできなかつたことができる夢の世界、今とは別の人生を歩めるといった声がユーザーから挙がり、『DreamExp』は大ヒットとなった。これにより、同開発会社であるDDD社トリプルディーから新たに登場したのが『Fantastic War』なのである。

また『Fantastic War』は、ネット上で毎回プレイの様子が配信され、プレイしていない人にも観るエンターテイメントとして絶大な人気を誇っている。ゲーム内では、毎回ランキングがつけられており、ランキング上位のゲームキャラクター、それを操作するプレイヤーはスター扱いされている。

こんなゲームが流行っているなんて世も末だな…。

宗佑は電車の入口付近の空いた座席にゆっくりと腰を下ろした。

電車の入り口付近にいる高校生の会話に耳を傾ける宗佑。

「お前は誰応援してんの？」

「俺？んーやっぱKEIかな。」

「かつけーじゃん。2丁拳銃でさ。」

あいつか……。確かにかつこいいが、女性ファンが多いあいつは嫌いだ。さっさとゲームオーバーになりやいいのに。宗佑はイケメンにただ嫉妬しているだけだった。

だが、あいつの使用しているベレッタM92は魅力的だ。プロットプアップ式ショートリコイル機構を持ち、スライドの上面を大きく切り取ったデザインは大変美しい……。テレビドラマや映画にも多く使用されているのは納得だ。

「俺は断然、<sup>ハル</sup>HARUだな！」

「なんせあの胸！スタイル！顔も綺麗だし、ヤバくね？」

それは同意だ少年。激しい戦闘の度に、激しく揺れるあの胸！男なら誰もが応援するだろう。俺は毎回あの子の胸：いやいやあの子の活躍を観るのが楽しみなんだよ。

「でもさ、あのゲームに参加してるってことは、やっぱ”こっち”の世界で色々あったダメ人間てことだろ？」



「まあ、キャラになるくらいだからねー。金のためでしょ？」

「クリアの報酬は確かに魅力的だよね。」

「プレイヤーなら別にいいけどさ、キャラは死ぬんだもんなあ。」

「下手なプレイヤーだとキャラもかわいそうだよね。」

「ああならないために、必死で勉強していい大学行こうとしてんだけどね。」

「ちげーねー。」

宗佑は自分が笑われてるような気分になった。ゲーム内で操作されているキャラクターは、社会に適応できなかった”人間”が、最後の希望を求めて、参加しているのがほとんどだ。

中には、自分の強さをひけらかしたい戦闘狂のようなやつもいるらしいが、少数派だ。

ゲームは毎ステージ勝ち抜くたびに報酬が得られる。勝ち抜いた数が増えるほど、金額が増えていくシステムだ。ただし、ある一定数まで勝ち抜かなければゲームから解放されることはない。当然、ゲームオーバーになれば操作されているキャラは死ぬことになる。

とても俺にはあんなこと…。

電車のドアが開き、宗佑はホームに降りた。

真つ直ぐに家へ向かうつもりだったが、少し歩きたい気分だった。

家の近くの商店街をぶらぶら歩き、小さな公園で足を止めた。

くしゃくしゃに潰れたソフトパックからふにゃふにゃの煙草を一本取り出し、口に啜えた。

上着のポケットからライターを探す。

が、見当たらない。

苛立ちながら全身を探っていると、目の前にオイルライターの火をつけ、こちらに近づく男性が。

オイルライターから出る火を啜えた煙草につけ、ふーっと煙を口から吐き出した。

「助かりました。ありがとうございます。」

「いえいえ。」

火をつけてくれた紳士なこの方は、すらつと背が高く、自分よりやや高い。ちなみに俺は175cm。年齢は40代ぐらいだろうか？顔の皺しわが少なく健康的な肌は、30代に見えなくもない。ピシッとスーツを着こなしている姿は俺より清潔感があり、好印象だ。

「私はかなりのヘビースモーカーだね。最近は煙草も値上がりして”こつち”の世界で喫う人は珍しくなったから、目に留まってね。」

「確かに”こつち”では、肩身が狭いですよね。」

ふと紳士に目をやると、煙草を薬指と小指に挟んで喫っていた。変わった喫い方だな。

沈黙が気まぎれなくなった宗佑は、紳士に話しかけた。

「この辺りに住んでいるんですか？」

「いや、私は外回りだね。ちょっと休憩しようと思って立ち寄ったんだ。」

紳士と宗佑は、たわいのない会話のキャッチボールを繰り返した。

「君は普段は何をしているんだい？」

喫っていた煙草を携帯灰皿で消し、宗佑に尋ねた。

「お、俺は…。」

宗佑は下を向いて、短くなった煙草を指でいじり始めた。

「平日の昼間にラフな格好で公園にいる時点でなんとなくわかるよ。」

宗佑は恥ずかしくなり、顔が熱くなった。

「図星かい？」

白い歯を見せて笑った紳士は、40代に見えた。

「からかわないでください。」

宗佑は初対面でいきなり小馬鹿にされ、少し苛立った。短くなった煙草で、新たに啜えた煙草に火をつけだしたのがその証拠だ。

「すまん、すまん。仕事柄色んな人を見てきたからね。なんとなくわかるんだよ。」

紳士はゴソゴソとスーツの上着のポケットから艶のあるレザーの名刺入れを取り出した。中から一枚名刺をつまみ、宗佑の目の前に差し出した。名刺のつまみ方が煙草と同じなのが気になった。

煙草を口に啜え、両手で名刺を受け取り、名刺に目を通す。

「えーつと……トリプルディーDDD社……。ト、トリプルディー社ってあのD r e e M E x pとかF a n t a s t i c W a rの?」

驚いた宗佑は啜えていた煙草を地面に落としてしまった。

紳士は宗佑が落とした煙草を屈んで拾い、携帯灰皿で消しながら話し始めた。

「私はトリプルディーDDD社のスカウト部 部長 ましますばる真島昴だ。まじまじじゃなくて、ましまだぞ。」

「はあ。」

少し戸惑ったが、宗佑も簡単な自己紹介をした。

「私は主にファンウーのキャラの人員を確保するためにスカウト活動をしている。」

「DreemExpはかなり前から動いているから、キャラのマーケットはかなり賑やかなんだけど、ファンウーはまだまだだね。ユザーからもキャラが少ないって声が多いんだ。」

「DreemExpは人権の問題でかなり揉めたけど、一応求人業者に募集できるんだ。ファンウーは人権以上に人命がかかってるからね。こうしてスカウトって形を取らざるを得ないんだよ。」

「で、俺をスカウトしようとしてるわけですか？ファンウーのキャラはゲームオーバーになったら、死んじゃうんですよ！」

「確かに。リスクはでかい。だが、見返りも大きいだろ？DreemExpで”あっち”の世界で雇われても、”こっち”の世界の年収のせいぜい、倍ぐらいしか稼げない。それで、自由は奪われるんだぜ？」

「ファンウーなら年収とか年収とか気にする必要はないな。そもそも報酬の桁が3つは違う。毎日撃ち合いをするわけじゃないから、普段は好きなことをしていてもいい。」

「ゲーム内の衣食住にかかる費用は運営側が持つし、ゲーム内で使用する兵器はプレイヤーが費用を負担する。クリアすれば、ゲームから解放されて、ゲットした金で”こっち”の世界で優雅に暮らせる。」

「人生逆転するには十分な待遇だろ？」

「…。」

宗佑は震える手でポケットから煙草を取り出そうとしてやめた。

真島は宗佑から名刺を取り上げ、名刺の裏側に連絡先を書いて再び宗佑に渡した。

「すぐには決められないだろうし、気が向いたらここに連絡してよ。」

「

宗佑に軽く手を振り、真島は公園を後にしようとするが、途中でピタッと立ち止まり、振り返った。

「言い忘れてたんだけど、今ランキングに出てるKEIやHARUをスカウトしたのも俺だから。君はそのスカウトのお眼鏡に叶ったんだぜ。」

ニカッと笑った真島はやはり40代に見えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7883y/>

---

Fantastic War

2011年11月24日02時46分発行